

イタリア、トスカーナ・コルニア溪谷ワイン組合理事長
トリノ・コンパクト社社長

宮川 秀之

カロッツェリアを日本に紹介
自動車デザインを飛躍させた功労者



宮川秀之(みやかわ ひでゆき)略歴

1937(昭和12)年 6月6日、群馬県前橋市生まれ。
1960(昭和35)年 早大在学中にオートバイによる世界一周を友人と企画、インド、中近東を経てヨーロッパへ。
1960(昭和35)年 イタリアでマリーザ夫人と運命的に出会い、結婚・永住を決意。これ以降、日伊自動車産業の架け橋となる。
1962(昭和37)年 創刊間もないCGの本誌特派員として、フェラーリ、ランチア、マセラティなどのイタリア車の試乗記事や、トリノ、パリ、フランクフルトなどのショー・リポートをイタリアから寄稿。
1967(昭和42)年 カーデザイナー、ジョルジェット・ジウジアーロと共にイタル・デザインの前身であるイタル・スタイリングを設立。
1968(昭和43)年 イタル・デザインに社名変更。
1970(昭和45)年 「開かれた家庭」という考え方に目覚める。
1983(昭和58)年 イタリアの友人家族とトスカーナに「ブリケッラ共同農園」開設。

1992(平成4)年 トスカーナの中世の城を本拠に私設「日伊文化センター」を設立、日伊間の草の根文化交流を盛んにする。
1994(平成6)年 日本の不登校、ひきこもりに悩む若者達への応援開始。
2003(平成15)年 人生のパートナー、最愛の妻マリーザ、天国に召される。
2004(平成16)年 ブリケッラ共同農園、欧州有機ワインコンクールにおいて金賞受賞。
2005(平成17)年 トリノ・コンパクト、ユベントス・サッカー・アジア・ツアーが成功裡に。
2006(平成18)年 トリノ・オリンピックの裏方支援で大いに盛り上がる。
2006(平成18)年 トスカーナ・コルニア溪谷DOCワイン組合理事長に就任。
2006(平成18)年 イタリア大統領より称号グランデ・ウフィチャーレおよび連帯の星勲章受賞。
2007(平成19)年 トリノとトスカーナ間を定期的に往復、スタッフと共に元気な毎日を送る。
2011(平成23)年 5月、トスカーナ・スベレートにおいて柴田陽子と結婚。

モーターサイクルで世界一周10万キロの壮途に

宮川秀之氏は1937年6月6日、関東平野の北西、背後に赤城山を望む前橋市に生を享けた。父は写真館、母は美容室を経営、ユニットで結婚式などをサポートしていた。特に父は当時としては恐らく前橋市内で唯一の西独製BMWフラットツイン600ccのバイクに乗る愛好家であった。宮川氏も免許が取れる年齢になると父のBMWに跨るようになる。この時に、彼の生涯の道は既に決まっていたのかも知れない。

宮川氏には幼い頃から趣味を同じくする親友がいた。幼稚園から高等学校まで同窓だった高島鎮雄氏だ。中学生になると二人は競って東京の外車ディーラーに手紙を書き、カタログを送ってもらった。カタログと言ってもメーカーの本物が送られてくることは稀で、大抵は日本で刷ったリーフレットであった。それでも翌日の朝には学校へ持って行って自慢しあった。この頃が二人の自動車社会への入り口であった。

高校へ進学すると宮川氏は恵まれた体軀を利用して野球部に入り、ピッチャーとして活躍する。進学した早稲田大学でも彼は野球に没頭した。しかし早稲田に入学後、残念ながら野球からは離れ、かわりに自動車に対する興味がますます盛んになる。やがて彼の目は世界へと向いてゆく。同郷で早稲田の1年後輩だった茜ヶ久保徹郎氏とバイクによる世界一周の夢を熱く語り合うようになったのだ。茜ヶ久保氏の父は社会党の国会議員であり、東京、上野の山口自転車工場の代表取締役山口シズエ氏とは社会党の同僚議員であった。この縁で、第二次世界大戦後はモーターサイクルにも進出していた山口自転車が全面的にバックアップしてくれることになる。二人は山口自転車から練習用に提供された2台のサイドカー付きのモーターサイクルで日本全土を走破したのち、弱冠20歳の1960年4月勇躍世界一周10万キロの壮途にヤマグチ製のオートバイ(250cc)で出発する。といっても財布の軽い貧乏旅行である。

最新のイタリアン・デザインを目の当たりにし、日本の自動車デザインを進化させる使命を確信

インドからパキスタンを経て1960年のオリンピックの開かれる直前のローマに達する。ここで二つの人生の転機に出会った宮川氏は、世界一周をギブアップす

る。ローマでは毎日新聞社の臨時職員となり、同紙の取材でローマを訪れる日本の各界名士の案内などに当たる。オリンピック中は家業の経験を生かして写真暗室を手伝い、またバイクで写真の急送にあたった。オリンピックが終わると、11月にトリノショーが開催される。その頃日本のモーターマガジン誌の編集部に在籍していた高島鎮雄氏が、宮川氏に取材を依頼、彼はそれに応えて自らも写真を撮ってリポートした。この取材を通して宮川氏は日伊の自動車界の人士と知遇を得る。同時に最新のイタリアン・デザインを目の当たりにした彼は、日本車のデザインがひどく遅れていることに気づき、日伊を結びつけて進化させなければならないと確信するようになる。

もう一つの転機は、トリノショーで将来の伴侶となるイタリア女性マリーザ・パッサーノさんと巡り合ったことである。マリーザさんは地元トリノで販売を手がけるランチア社の役員で業界の名士、パッサーノ氏の令嬢で、日本に魅せられ、日本語を学んでいた。その後広島に留学したマリーザさんを追って帰国した宮川氏が求婚、二人は結ばれてトリノに居を構える。敬虔なカトリック教徒であるマリーザさんは、宮川氏に社会への様々な貢献を約束させる。二人は自ら四人の子を設けるが、韓国から一人、インドから一人、トリノから一人の孤児を養子に迎え、さらにアフリカの四人の孤児の養父母となる。こうした社会貢献が宮川氏の信用を高め、次第にイタリア自動車界に受け入れられていった。

イタル・デザインを設立

自動車のデザインに深い関心を抱いた宮川氏は、自らデザイナーを夢見たが、次第にコーディネイターとしての力量を発揮するようになってゆく。中でも最大の仕事は、1歳年下のデザイナーでカロッツェリア・ベルトーネ、次いでカロッツェリア・ギアのチーフデザイナーとして当時頭角を現していたジョルジェット・ジウジアーロ氏を独立させ、1967年にイタル・スタイリング(1968年にイタル・デザインに社名変更)を設立したことであった。同時に彼は、東洋工業(マツダ・ルーチェ)、いすゞ(117クーペ)、鈴木(キャリイ、フロンテ・クーペ、ワゴンR)、三菱(コルト・ギャラン、ミラージュ)、日産(マーチ、セドリック)、トヨタ(カロ



1966年 マツダ・ルーチェ



1969年 スズキ・キャリイ



1979年 アッソ・ディ・フィオーリ



1991年 スバル・アルシオーネ SVX

ーラ、アリスト)、富士重工(アルシオーネSVX)、ホンダ(アコード)、ダイハツの軽自動車の数モデルなどとジョルジェット・ジウジアーロ氏を結びつけ、日本車のデザインの急速な進歩を促したのである。その後もイタル・デザインのジウジアーロ氏は、モーターショーに次々と前衛的なプロトタイプを出品して世界のカーデザインをリードするとともに、フォルクスワーゲン・ゴルフやアルファスッド、フィアット・パンダなど、多くの量産車のデザインを手がけて大きな成功を収めた。その功績により、ジウジアーロ氏は2002年アメリカの自動車殿堂入りを果たした。

日本とイタリアの架け橋に

イタリア自動車界に根を下ろした宮川氏は、次第に実業家としての資質を表し、幾つもの会社を持ち、日伊間を始めとする国際的な通商に活躍するようになる。

例えば日伊間で互いに相手国に無い自動車用工作機械の輸出入を取りまとめたり、スズキのモーターサイクルのイタリアへの輸入を行なったのも彼の会社であった。こうして宮川秀之氏は、長く日本とイタリアの架け橋となり、日本車のデザイン面などの進歩と国際化に大きく貢献したのである。

1992年宮川夫妻と一家はトリノを引き払い、トスカーナのブリケッラに移住、1983年以来参画していたその農場の主人となり、有機ワイン作りを行なっている。そこでは日本の引きこもりの不登校児を引き取って育てる一方、アグリ・ツーリスモ(農業体験旅行)も実施している。2004年にはブリケッラのワインが欧州有機ワイン・コンクールで金賞に輝いた。2007年にはイタリア国内でのこうした功績に対し、イタリア大統領から外国人としては最高榮譽の「連帯の星」勲章を授与された。(日本自動車殿堂 研究・選考会議)



トリノの空港から出発する前の宮川秀之氏(左)とジョルジェット・ジウジアーロ氏(右)。2014年頃



宮川氏が乗車しているシボレー・コルベア“テストュード”は、ベルトーネ時代のジウジアーロ氏の傑作。このクルマによって、ベルトーネのデザイナーがジウジアーロ氏であることが初めて公になった。1963～64年頃



ランチア アウレリアGTの横に4人が立っている写真は、左端が宮川夫人のマリーザさん、隣が宮川氏、マリーザさんの妹マリエッラさん。右端は姉妹の父、パッサーノ氏。1962年頃 イタリアトリノ市にて



いすゞ117クーペは、宮川氏とジウジアーロ氏のチームによる傑作車である。左から宮川氏、奥様のマリーザさん、ジウジアーロ氏。いすゞからの感謝状とトロフィーと共に。いすゞの藤沢工場内。1972年頃